

自主シンポジウム 5

飼育活動の楽しさとその意味

企画者 安部富士男

(日本体育大学女子短期大学)

話題提供者 木都老誠一

(金井幼稚園)

司会 前川吉彦

(付属日本大学幼稚園)

話題提供者 安部富士男

(安部幼稚園)

話題提供者 井上輝夫

(大庭城山幼稚園)

指定討論者 加藤繁美

(山梨大学)

テーマ設定の趣旨

私たちは、子どもの発達を、単にあることが「できるようになる」とか「わかるようになる」という視点からではなく、人格の発達として捉えています。

人格の発達は、感性・感情、意欲の系の発達と認識、操作の系の発達が結びつくところで促されていくと考えています。

幼児期においては、特に、感性・感情、意欲の発達が、認識、操作の発達を支えに、人格発達の主導的側面をなすと考えています。

そのような視点に立って、私たち、3人は、経営者・園長、教師、父母たちも、子どもたちも、自然に寄り添い、自然の恵みを生活の中に取り入れ、自然に感謝しながら、充実した遊び・豊かな仕事のある生活を築いていくことを大切にしてきました。

保育実践を通して、私たちは、子どもたちが、動物との出会いの中で、総合的な活動を主体的に創造しながら人格発達の礎となる力の根を太らせていると実感しています。

現在の社会の文化状況、地域の生活状況、何よりも子どもたちの状況は、『いのち』との出会いを保障することの緊要性を、私たちに示唆しています。

『いのち』との出会いは、同時に、いつの日いか、子どもたちに『いのち』との別れに遭遇する必然を含んでいます。

私たちは、日々の園生活の中で、飼育活動の楽しさが、子どもたちの生活の目当て（主体的に生きる力）の源となり、一人ひとりの人格の発達に深くかかわっていると実感しています。

今回は、『いのち』との出会いと別れが、子どもたちの「ものの見方、感じ方、考え方、行動の仕方、表

現の仕方」にどのような影響を与えていたかを吟味し、その影響の発達的な意味を参加者とともに考え合いたいと願い、表記のテーマで、シンポジウムをすることにしました。

特に、『感動に裏打ちされた体験を「ことば」や「造形活動」や「身体表現」などを通して意識化すること』と『主体的に生きる力の育ち』との関係に迫ることができればと願っています。

ここで、誤解を避けるために、一言、付言すれば、私たちは、「造形活動」や「身体表現」を総合活動に有機的に組み込まれたものとして捉えています。生活に根ざした活動と表現してもよいかと考えてます。

私たちは、保育には

- ①「自由な場面における遊び・仕事（労働）」
=『土台となる生活』
- ②「文化との出会いを系統的に身につけていく活動」
=『課業的活動』
- ③「特定集団が一定期間、共通テーマで取り組む活動」
=『中心となる活動』

といった3つの質の違った活動があって、それらが有機的に結びつき、園生活を豊かにしていくと考えています。

それらの結びつきの質は、

- ①『教師と子ども』
 - ②『子どもと子ども』
 - ③『教師集団と子どもたち』
 - ④『教師と父母』
 - ⑤『教師と教師』
 - ⑥『父母と父母』
 - ⑦『経営者・園長と教師たち』
- といった多様な人間関係の質に規定されています。

それらの人間関係が、環境に織りなして、かもしだす雰囲気の教育力は、子ども、父母、教師、園長・経

営者、それぞれの主体性が大切にされ、響き合って、自己実現できる保育を築く上で、欠くことのできない条件になっていきます。

私たちは、保育を構造的に捉える視点、子どもたち、一人ひとりの発達は園を構成するさまざまな人間関係の質に規定されているという視点を視野におきながら、今回は「飼育活動の楽しさとその意味」に焦点を絞って話題を提供するつもりです。

シンポジウムの進め方

まず、大庭城山幼稚園・井上輝夫さんが「小馬のトミーとチェリーとの出会いの中で」という題で、次に、金井幼稚園・木都老誠一さんが「山羊のタックンが赤ちゃんを産んだ」という題で、最後に、安部幼稚園・安部富士男が「山羊の赤ちゃんの遊園地づくり」という題で、それぞれ、子どもたちのエピソードを中心に「テーマ設定の趣旨」にそった話題を提供します。

井上さんは

- ①小馬などの大きな動物との出会いのなかで
「あったかーい」「きもちいい」「おおきい」
- ②身近な存在から「生活するなかま」へ
「あつくてだいじょうぶかな」「さむくないかな」「ごはんあげようよ」
- ③「なかま」への思いやりとしての係活動
当番活動としての動物、係活動としての動物
- ④「いのちの重み」、「生への喜び」をうけとめられる子たちに
出産、別れ（死）、病気、怪我など
- ⑤栽培活動や園外保育などとの関連のなかで
自然界の一員としての人間（子ども）や動物、植物、労働（しごと）とその成果

木都さんは

- ①興味・関心と子どもの伸びる力
「A君が変わった」
- ②遊び・仕事とのかかわり

「動物当番」

- ③いのちへの感動と観察の目
「タックンが赤ちゃんを産んだ」
- ④いのちを思う
「タックンの死」
- ⑥感動から表現へ
「天国に行ったタックン」

安部は

- ①子どもに癒されつつ、子どもを支えつつ生きる
「園長先生、ハンサムだよ」
- ②感動と興味・関心の深まり
「お母さん、ウンチ、食べている」「きたねえな」「山羊のしっぽはエレベーターだ」
- ③響き合う関係の深まり
『山羊がかりの歌』を歌いながら餅づくり
- ④伝え合いの中から共通課題の発見
「山羊、ご飯、食べながらお話しするよ」「山羊の子どもも、遊ぶの好きだね」「遊園地を作ろうよ」
- ⑤仕事（労働的活動）の誕生
遊園地の設計図⇒素材と道具⇒協力すること
- ⑥ファンタジーが係活動の楽しさを育む
「山羊の赤ちゃんが空を飛んだ」
- ⑦別れ（死）が子どもたちの心に残したもの
「赤ちゃんが、透明人間になって、空を飛びながら、僕たちを見ててくれるよね」

これらの話題を手がかりに、参加者の方々とともに、飼育活動を園生活に位置づけることの意味を考え合います。

なお、指定討論者の加藤繁美さんには、3人の話題提供が終わったところで、討論の柱建てと討論の方向を示唆していただき、シンポジウムの最後に、幼稚園・保育所における飼育活動の現状と課題に触れていただきます。